

Ship

A I C H I
P R E F E C T U R A L
M U S E U M
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

創刊号

創刊にあたって
「芸術は総合なり」
井関 弘太郎

鑑賞会

鑑賞会は至福の時間
宮崎 玲子

友の会鑑賞会に参加して
岡田雅子

会報に名前を

事務局から

1
2
3
4
5
6
7
8

新しい友の会
—相互協力の試み—
浅野 徹

所蔵作品紹介
パウル・クレー
《女の館》

お知らせ

「愛知県美術館友の会会報」の創刊にあたって

芸術は総合なり

愛知県美術館友の会会長・名古屋大学名誉教授

井関 弘太郎

昭和40年代の後半、東京大学を定年になられたフランス美術史の泰斗吉川逸治先生が、2・3年の短期間であったが、名古屋大学文学部の美学美術史教室に教授としておいで下さったことがある。丁度フランスから帰ったばかりの、まだフランス病が癒えない私は、折りを見て、門外漢の無知をも顧みず、先生からフランス美術のあれこれがかかうことを楽しみにした。とるにたらない愚問にも、先生はご親切に、断片的だが、さまざまな示唆に富むお話をして下さいました。

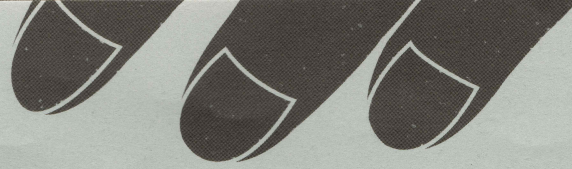
そうしたなかで、なぜか二つの話題がとくに記憶に残っている。その一つは、「ゴシック式の教会の場合、建設費の半分はステンドグラスの作製費ですよ」のお言葉である。光が織り成す堂内の、宗教的雰囲気醸成の大切さが、能く具体的に理解された。

そしてもうひとつは、「ヨーロッパ芸術の全ては、教会から生まれたのですよ」で、絵画・彫刻・音楽などなどに分化されている芸術も、教会内では渾然一体であり、あげて宗教的雰囲気を高めるうえの叡智の形象であることを知った。言葉を換えれば芸術はジャンルを越え、ハーモニックに総合されてこそ、芸術であることに気付いたのである。

そうした開明から、改めて幾つもの同旨の文章や言葉に気付いたが、とりわけ平田清明京大教授(当時)の「セーヌに我が眼を疑う」(『図書』427号、1985年)の次の一文は、よくわが意を捉えていた。「ソルボンヌ門前のクリュニー美術館で、私は“感覚”と題する絨毯を、今から十年前、森有正氏と見続けた。これは、見る、触る、味わう、嗅ぐ、聞く、の五感を図案に示したものであった。それらが一堂に集められ、それらの同時的連関をこそ味わうべきものとして展示されていた。したがってまたそれらの総合感覚としての第六番目の感覚が示唆されていた。」

こうした芸術観が、少なくとも私の場合、愛知芸術文化センターの建設に際して、意外にも重い役割を果たすことになったのである。

実は、当センターは栄公園・久屋大通公園のなかの一つの公園施設なのである。しかし緑を守るべき公園では、施設をやたらに広げることではできず、「都市公園法」で厳しく制限されている。それによると施設の占めうる面積は、公園面積の百分の二までで、教養施設に限り百分の五まで、それにプラスできるが、その「教養施設」は、同法第二条で



「植物園、動物園、野外劇場その他の教養施設で政令で定めるもの」とされ、「その他」は政令で「図書館・陳列館（美術館・博物館）」に限られ、劇場やコンサートホールなどは含まれない。これには困った。ヨーロッパの都市では、都心部にオペラ劇場をおくのは普通である。名古屋でそれが可能なのは栄公園の地だけだが、面積の制約に加えて、施設の用途制限から、複合施設としての芸術・文化の殿堂をそこに建設する夢は難しくなった。

新文化会館建設事務局は頭を抱えたものの、懸命に都心立地の意義と県民の要望を中央省庁に訴え、実現に努めたが、遂にそうした交渉に、建設委員会総合調整部会長の私にも、県職員とは別の立場で説明してくれと依頼されるに至った。話下手に加え、短気な私が脱線し、折角詰めてきた交渉の成果を打ち毀しはしないかと気が重かったが、安井建設事務局次長（当時）らに同行し、とうとう中央官庁のお歴々の前で、一世一代の芸術論を、^{じくじ} 忸怩を感じつつ弁じたのである。その時の話の柱が、さきの吉川先生のお話や平田教授の文章であった。

バチカンのサン・ピエトロ大聖堂の堂内などを頭に描きながら、「歴史を語る美事な天井画・壁画の囲む堂内には、幾つもの彫像がおかれ、ステンドグラスを通して射し込む幽玄な光の奥からは、オルガンの荘厳な響きに和して、聖歌隊の合唱が木霊する。こんな空間全体が一つの芸術なのです。製作・演技技術の高度化や鑑賞層の拡大ともなっていて、絵画・彫刻・音楽などなどに分化しましたが、本来、芸術は一体であり、調和的総合体なのです。サン・ピエトロ大聖堂の一切に係わったミケランジェロの芸術を思いおこして下さい。バロック芸術、ロココ芸術などと言われるものも、芸術文化の総合した特性に対して与えられた名称です。愛知県新文化会館が、美術館・オペラ劇場・コンサートホールなどを一つの建物に取り入れようとしているのは、確かに用地面積の制約にもよりますが、私はもっと積極的に、各種芸術を一堂に集めることの意義、つまり、芸術総合の殿堂にしたいという夢をもつからです。」

いま思うと、よくもこんな厚顔なことを人前で言えたもので、それは一つの興奮状態から、日頃の思いを口走ったからであろう。そのような演説がどれほどの効果を果たしたかは知らない。しかし幸いなことに、恐らく事務局の懸命な努力によって、いま見るような複合施設としての芸術

文化センターの建設が承認されたが、それは決して異種芸術施設の便宜的寄せ集めではなく、「芸術は総合なり」をコンセプトにした芸術文化総合の殿堂として開花したのである。そうした想いは、当センターの端々にまでみられる。屋内公園としての吹き抜け「フォーラム」を、10階美術館へ通ずるエスカレーターが、美の世界へ向かう「心のときめきの道」（伊藤延男美術館部会長）として、当初プランより延長されたのも、その一例である。私は「般若心経」の「羯締 羯締 波羅羯締」（行こう行こう美しい安らぎの世界へ）をこれに思っている。

先年、南仏ニースのシャガール美術館の、大きなペルシヤンブルーのステンドグラスをもつ小さなホールで、深い水底を、あるいは星月夜の空間に漂う幻想に誘われ、彼の画中の人物との間に、心理学でいう同一視に近い気持ちになったが、その時ホールに置いてあったピアノの妙音がこれに加われば、もっともっと深く陶醉したろうに、と惜しんだ。

しかしそうした絵と音のハーモニーに対する心残りは、左程の時を経ることなく、何と当センターで叶えられたのである。

平成5年5月、「パウル・クレーの芸術」展に合わせて、「音と絵の対話 Paul Klee を観る パウル・クレーを聴く」が劇場小ホールで催され、栗津則雄のレクチャーに次いで、加古 隆のピアノコンサートに浸ったが、改めて「これだ」と納得した。

そしてその年の晩秋、「バロック・ロココの芸術」展に際しては、バッハの曲が、脇山陽子により、数日にもわたってコンサートホールのパイプオルガンで奏でられた。芸術総合の殿堂ならではのことであり、そうした飲びがこれからも繰り返されるであろうことが嬉しい。

新しい友の会 —相互協力の試み—

愛知県美術館長

浅野 徹

愛知県美術館に美術を愛好する方々が集い、美術館の活動を支援し、また、会員相互の美術についての教養を高めることを目的として、友の会が発足して半年が過ぎようとしています。この会は、名古屋大学名誉教授の井関弘太郎先生をはじめとする方々を発起人として設立の運びとなりました。私たちとしても、美術館の活動を理解していただき、いつも利用し、応援して下さる方々の集まりができればという希望はありました。それ故、この友の会の発足は美術館としても、たいへん慶ぶべきことだと思っています。

美術館の友の会（あるいはメンバーシップ）には、ごく素朴な親睦団体から美術館の活動を財政的に支援しようとするものまで、当然さまざまなかたちがあるはずですし、それには当の美術館の性格や運営形態が大いにかかわってくるに違いありません。ただし、さまざまなかたちがあるとしても、友の会は、その最も基本的な条件として会員の側にも美術館の側にもお互いに利益となるものでなければ長く続くものにはならないでしょう。利益という言葉を使いましたが、それは経済的な面を指すばかりでなく、むしろそれ以上に精神的な意味も含んでのことであるのはいまでもありません。

ところで、旧愛知県文化会館時代の美術館にも友の会があったことをご存知の方も多いと思います。昭和37年に発足して以来長らく県下の美術愛好者の核となり、美術館の活動を支援して下さった功績は、決して少なくないものでした。もう故人となられた岩田宗十郎氏が会長をつとめておられましたが、その岩田氏から友の会の存続のご相談を受けたのは、私がまだ県庁内の新文化会館建設事務局にあって新しい美術館の準備にたずさわっているときでした。新美術館は、これまでの美術館とはかなり異なったものになるであろうとしている、そうになると友の会も新しい観点から考え直さねばならなくなるはずで、しばらく時機を見ていただきたいと申し上げたのを覚えています。

かつての美術館は、日展、院展、二科会、春陽会など数多くの公募団体や愛知県をはじめとす中部地域の美術グループの方々に作品発表の場を提供する貸会場機能が中心であって、所蔵品による常設展示や美術館独自の企画展の開催という美術館本来の活動は、きわめて限られた範囲でしか許されていませんでした。新美術館においても従来の貸

会場機能を十分なスペースを取って引き継ぎましたが、面目を一新したのは芸術文化センター10階の所蔵作品展と企画展に現れてきているものであり、ここに愛知県美術館は以前とは異なる規模と内容によって美術館本来の姿を見せはじめたと言えます。

平成4年10月に開館して一年半ほど経った頃から、ようやく友の会設立の気運が動いてきました。発起人には旧友の会で副会長として会の仕事に尽力された武藤健吾氏にも加わっていただき、皆様とご相談をしながら、この友の会の活動の基本となる性格が定められました。私は、この会の目的が美術館との相互の協力関係を基本としていることは特筆すべきことと考えています。そして発足と同時にその活動が開始されたわけですが、この半年は、いわば試行期間だったと考えられます。その主だったものは、美術館の活動を支援していただくということで、展覧会の広報をお手伝いいただけるようになり、ポスターやチラシを会員の皆様にお送りして、広報活動を支援していただいております。平成4年に新しい愛知県美術館として生まれ変わって、まだそれほど時間がたっていませんので、この美術館を定期的にご利用いただく会員の皆様から、多くの人々に展覧会を紹介していただけることはたいへん心強いことです。そして、会員の皆さんがより一層美術に親しまれ、理解を深めていただくことをめざして友の会の事業として始まったのが企画展ごとに開催する鑑賞会です。これは、あらかじめ担当の学芸員から、展覧会についての説明を聞いていただき、その後、会場で作品について語り合いながら鑑賞するというかたちのもので、普通に展覧会をご覧いただくのとは、また違った面白さがあると思っております。参加者の皆さんからのご質問などは、学芸員にも良い刺激になっているようです。

友の会の活動はまだ限られた範囲のものですが、今後も役員の方々を中心に有意義な事業をご企画いただき、美術館と友の会が協力しながら活動の輪を広げていければと願っています。



鑑

賞

会

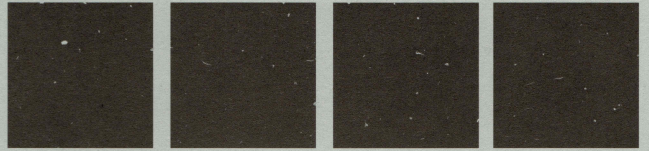
鑑賞会は至福の時間

愛知県美術館友の会副会長
宮崎 玲子

美術館の静寂の中で一枚の絵と向き合うことは、煩雑な日々の中では替え難い時間である。絵の語りかけにじっと耳を傾け、自分なりの受けとめ方をする。時には同好の友人たちと小声で感想を語り合うのも悪くはない。これまでの私の美術鑑賞の仕方であった。

友の会が発足して新しい催し「鑑賞会」が開かれることになり、昨秋の展覧会「聖なるかたち」がその第一回目の催しになった。まず最初に一時間、寺門学芸員から講義をうかがう。これでかなりの知識を頭に入れる。それから展覧会場に入るのだが、その時は午後六時を過ぎて友の会の会員だけが入場する。そして浅野館長はじめ数人の学芸員の方々が同行して下さっている。「後期ゴシック美術」まして宗教美術は私たちには馴染みが薄く、ただ通り過ぎてしまえば造形的な美しさだけにしか目が行かない。この鑑賞会では一つ一つの聖像の持つ意味、寓意性など作品を目の前にしての解説に興味はつきない。頭でっかちでバランスが悪く、何となくカリカチュア染みた彫刻も「これは高い所であって、信仰する人は低い所から見上げるのです。」といわれて皆一斉にしゃがみこむ。なる程みごとな聖人たちだ。「この聖女の持っている物は何ですか」どの学芸員の方々も親切丁寧に解説して下さる。あちこちで笑い声や感嘆の声、深い情感をたたえた聖女たちがますます美しく輝いてくる。実際にヨーロッパの教会に行っても、これ程間近に聖像を見ることはできない。まして素敵な解説つきでの鑑賞にすっかり満足した夕べであった。

二回目は「香月泰男展」。牧野学芸員から戦争画の歴史について講義をうかがう。今回の鑑賞会も前回同様楽しいものになった。香月泰男のシベリヤシリーズは知っていても、こんなところにこんな文字が、この記号のようなものは実は旗であったとか、解説をうかがって納得することばかり、美術を愛好する者にとってこの鑑賞会はまさに至福の時間、私の美術鑑賞に今までと違う大きな楽しみが加わったのである。



友の会鑑賞会に参加して

愛知県美術館友の会会員
岡田 雅子

10月と1月の二回の友の会鑑賞会に参加しました。今までにこのような経験がありませんでしたので、一つ一つの作品の前で聞くお話はとても興味深いものでした。

一回目の「聖なるかたち展」では、その時代の背景、この展示物が教会内のどの位置にあってどんな意味があるかなど、とても解りやすく説明して頂けて楽しい時間を過ごすことができました。

二回目の「香月泰男展」では、彼の過酷な体験が絵の中にいろいろな形で描写されていることを知ることができました。

私は、主人の仕事の都合でヨーロッパに住んでいた時、よく美術館を訪れました。その時、先生に連れられた小学生の団体としばしば会いました。目の前の本物を見ながら聞く先生の言葉はきっと子供たちに深く焼きついたこととあらためて思い出しました。この会に参加できて本当に幸運だったと思っています。これからも楽しみにしています。



所蔵

作品

紹介

パウル・クレー 《女の館》

1921年 油彩、厚紙 41.7×52.3cm

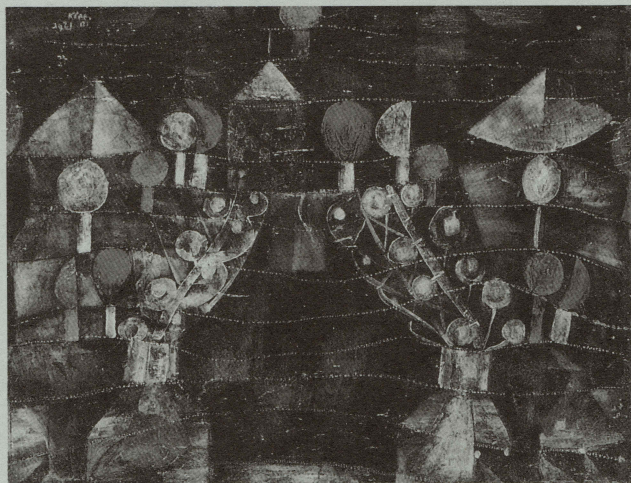
愛知県美術館主任学芸員

村田 真宏

パウル・クレーは、今世紀の前半にスイス、ドイツを中心に活躍した画家として知られています。愛知県美術館では、1993年にクレーの大規模な回顧展を開催しましたので、会員の皆様の多くは、既にその芸術の魅力に接していただいていることと思います。美術館では、そのクレーの重要な作品を新しく収蔵し、4月11日からの所蔵作品展で公開することになりました。

この作品は、クレーが総合的な造形芸術のための学校であるバウハウスに教授として招かれた年に制作されたものです。画面は濃淡の緑色を基調とし、波打つような平行線と、垂直線による区画で構成されています。そしてところどころに置かれた赤や空色は、花開く樹々や建物の窓を想わせ、刺繍を縫いつけたかのような幕や、館の塔のような形態も見ることができます。画面からは幻想的な印象を受けますが、大切なことは、クレーがここで絵画での音楽的な表現を試みている点にあります。音楽にも造詣の深かった彼にとって、平行線と円という組み合わせは、五線譜と音符を暗示するものです。彼はここで簡潔な線、単純な形態、透明感のある色彩を組み合わせ、それらの緊張関係を高めることで、本来目には見えない音楽を、視覚的に表現しようと試みています。確かにこの作品の色彩の重なりや形態の連続には、音楽にとって基本の要素といえるハーモニーやメロディー、そしてリズムを感じさせるところがあります。このような造形の試みは、バウハウスに招かれた頃のクレーを特徴づけるものです。そのことを、このように完成度の高い作品によって身近に知ることができるのは、たいへん幸運なことだと思います。

美術館では、クレーの作品として1939年の《回心した女の墮落》という晩年の作品と、他にも2点の版画作品を所蔵していますので、この作品が新たに加わることで、いっそう充実した展示が可能となりました。



会 報 に 名 前 を

私たち友の会の会報が創刊されました。しかし、まだ名前がありません。会員の皆様に良い愛称を付けていただきたいと思っています。会員の皆様、またこれから会員になれる皆様から、この会報の名前を募集いたします。未永く親しむことのできる愛称をお考えください。

- 名前は漢字、カタカナ、英語など何でも結構です。
- 応募は「はがき」または、新年度会員申込時に適当な用紙にて事務局までお送りください。
- 応募の際は、会報の名前、読み方、できればその意味、応募下さる方のお名前と住所、電話番号、会員の方は会員番号を明記してください。
- 募集締切 1995年4月30日
- 応募いただいた名前のなかから、友の会の理事会でこの会報の名前を決定します。
- 決定した名前をつけてくださった方には、記念品をさしあげます。

お知らせ

芸術文化センター内のレストラン、喫茶室では美術館友の会の会員割引を4月1日から実施します。内容は、会員がご自身で利用される場合、10%の割引となります。お支払の時に友の会の会員証をご提示ください。

なお、団体でのご利用の場合は、あらかじめ各店とご相談ください。

芸術文化センター内のレストラン、喫茶室は次のとおりです。

ロイヤルホテルレストラン TEL 972-0924

・レストラン アルページュ (11F)

・鉄板焼レストラン なにわ (11F)

・テラスレストラン ガーデン (10F)

喫茶 る・るぽ (9F) TEL 972-0839

レストラン アフロディーテ (2F) TEL 972-0925

喫茶 アルス (B2F) TEL 972-0926

※コンサートホール、大劇場のビュッフェでの割引利用はできません。

事務局から

ポスター

会員の皆様に企画展のポスターをお送りしていますが、このポスターを折らずに送って欲しいとのご要望がありました。事務局としても折らずにお届けしたいのですが、郵送料のこともあり、今のところ折ってお送りすることでお許しいただきたいと思っています。このポスターは、まずは皆様のご協力で展覧会の広報をしていただくためのものですので、ともかく多くの人の目に触れるところに張り出していただきたく存じます。

そうすると会員の皆様のお手元には、ポスターが残らなくなるわけですが、きれいなポスターをご希望される場合には展覧会会期中、ご来館いただいた時に別にお渡しすることを検討しています。詳しくは、後日お知らせします。

鑑賞会

友の会の事業として、企画展ごとに鑑賞会を開催しています。ご参加された方々からはご好評をいただいています。一方で、参加するには鑑賞会の時間が夕刻に当たり参加が難しいとのご指摘もいただいています。この鑑賞会の一番の特徴は、閉館後の展示室に皆様と学芸員とで、気軽に話し合いながら作品を鑑賞するということですので、この時間帯での開催を変更することは困難です。

音楽のコンサートや演劇などは、多くが夕刻から夜にかけての開催になっていて、これが世の中で定着しています。お出かけになりにくい方もいらっしゃると思いますが、コンサートなどに出かけるつもりで、ぜひ一度、思い切ってお参加ください。

Member

編集：愛知県美術館友の会事務局／村田真宏

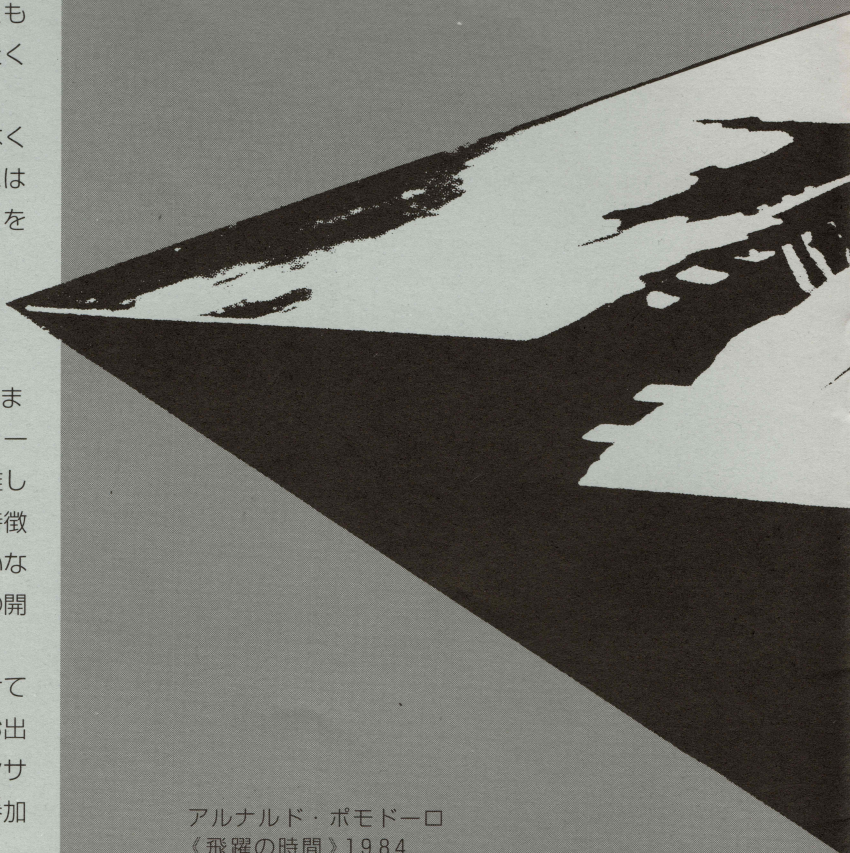
発行：1995年3月

愛知県美術館友の会

〒461 名古屋市東区東桜1-13-2

TEL.052-971-5511

デザイン・レイアウト：小谷恭二



アルナルド・ポモドーロ
《飛躍の時間》1984